民族関係の結合関係の可能性―戦後来日した在日韓国人女性の生活史

学籍番号　　１２００２０３４
氏名　　松川景行
指導教員名　立木茂雄

目次

要旨　ｐ 1
1 序章　ｐ 2
1.1 研究の動機　ｐ 2
1.2 研究の意義　ｐ 3
1.3 先行研究　ｐ 3
1.3.1 研究方法　ｐ 3
1.3.2 研究成果　ｐ 4
1.4 調査枠組み　ｐ 5
2 方法　ｐ 5
2.1 調査対象者　ｐ 5
2.2 生活史法（ライフ・ヒストリー法）ｐ 5
3 戦後来日した在日韓国人女性の生活史　ｐ 6
3.1 生活史の背景　ｐ 7
3.1.1 ヘップサンダル　ｐ 7
3.1.2 頼母子講　ｐ 7
3.2　Ｙ氏の生活史　ｐ 7
3.3　Ｚ氏の生活史　ｐ 15
4 考察　ｐ21
4.1「信頼」　ｐ 22
4.2 関係拡張と民族関係の結合関係の可能性　ｐ23
5 まとめ　ｐ24

要旨

在日韓国人女性Ｙ氏とＺ氏は，40 年以上前に来日した．日本最大のコリアタウンである大阪市生野区に住んでいる．一般的に，異民族同士が良好な関係を結ぶのは難しいと言われているが，Ｙ氏とＺ氏は「日本人も韓国人も関係ない」と口にする．Ｙ氏とＺ氏を見ていると，異民族同士の結合関係は決して不可能ではないと思えてくる．そこで，筆者はＹ氏とＺ氏の生活史から民族関係の結合関係の可能性を探りたいと考えた．

生活史調査の結果，Ｙ氏とＺ氏に見られた日本人との結合関係は，それが在日韓国・朝

鮮人との関係に固執するよりも有益となる場合に生じていたことがわかった．このことから，「信頼」の関係拡張の側面に民族関係の結合関係の可能性があると言える．

ここでいう「信頼」は山岸俊男の議論で、「社会的不確実性（相手に騙されてひどい目にあったりする可能性）が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までもふくめた意味での）人間性のゆえに，相手が自分に対してそんなひどいことはしないだろうと考えることである」（山岸　1998:40 ）．山岸によると，「信頼が必要とされるのは社会的不確実性の大きな状況であり，逆に言えば，相手に騙されてひどい目にあったりする可能性がまったく存在しない，つまり社会的不確実性がまったく存在しない状況では，信頼は果たすべき役割をもたない」（山岸　1998:15 ）．また，「一般常識では，信頼は人々の間の結束を強める働きをする」のだが，「信頼にはそれと同時に，人々を固定した関係から解き放ち，新しい相手との自発的な関係の形成に向かわせるという，関係拡張の側面もある」（山岸　1998:4 ）．

生野の在日韓国・朝鮮人社会には，社会的不確実性が高いという側面がある．Ｙ氏とＺ氏に見られる日本人との結合関係には，「信頼」の関係拡張の側面が作用していたと言える．

先行研究を展望すると，谷富夫は「生活構造の中の民族以外の地位－役割関係（例：職業ほか）をバイパスして民族間の顕在的結合関係に至るルート」（谷　2002:200 ）を指摘しているが，「信頼」の関係拡張の側面は「バイパス結合」を促す一要因だと言える．

１　序章

1.1　研究の動機

大阪市生野区は日本最大のコリアタウンとして知られている．韓国・朝鮮籍者の人口は2002年３月現在で 34325 人（大阪市統計書）で，生野区の全人口の約25%を占める．この生野区に「いくのオモニハッキョ」というボランティアの識字教室がある．「オモニ」は韓国・朝鮮語で母親，「ハッキョ」は学校を意味する．つまり，「オモニ」の学校というわけだ．このオモニハッキョでは主に１世の在日韓国・朝鮮人女性、即ち「オモニ」が日本語の読み書きを勉強している．日本語を教えるスタッフはほとんどが日本人だ．

筆者は大学１年の頃からオモニハッキョにボランティアスタッフとして参加している．「オモニ」とスタッフは、少なくとも筆者の目で見る限り，仲が良い．当初，筆者はそのことに違和感を感じなかった．しかし、筆者が在日韓国・朝鮮人に関する書籍をかじるよ

うになると，「オモニ」とスタッフの仲のよさに少し疑問を持つようになった．例えば，姜信子の『ごく普通の在日韓国人』（姜　1987 ）を読むと，日本人と在日韓国・朝鮮人の相容れない様子がうかがえる．それでは，なぜ「オモニ」は日本人から字を教わろうと思うのだろうか．思えば、筆者が本論文を書こうと思った最初のきっかけはここにあったのかもしれない．

あるとき，筆者がオモニハッキョの授業中に担当のオモニ（Ｚ氏）と雑談をしていたときのことだった．Ｚ氏が次のようなことを言った．「私は40になってから変わった」．Ｚ氏はとても明るい方で，よく冗談を言っては筆者を笑わせてくれるのだが，40歳まではとても内気な性格だったというのだ．続けて，Ｚ氏はこう語った．「日本に来て強なった」と．そのとき，傍らにいたＹ氏も「そんなんもある」という．また，Ｙ氏・Ｚ氏ともに「日本人も韓国人も関係ない」と口にすることがある．ちょうど筆者は卒業論文のテーマを考えていた最中であり，「日本に来て強なった」というＹ氏・Ｚ氏の人生に興味を持つようになった．こうして，筆者はＹ氏とＺ氏を対象に生活史調査をおこなうことにした．

1.2　研究の意義

「日本人は異民族と、①現状においていかなる関係を結んでいるのかいないのか，②将来においていかなる関係を結ぶことができるのかできないのか，そして，③いかなる関係を結ぶことが望ましいのか望ましくないのか，」（谷1992:263）これは，谷富夫が民族関係の社会学を日本で始めるにあたり設定した課題である．現在，民族関係の社会学は民族関係の結合関係の可能性について興味深い示唆をあたえている．

筆者は，Ｙ氏とＺ氏の生活史には，民族関係の結合関係の可能性を考える上で何らかのヒントがあるのではないかと考えた．Ｙ氏とＺ氏の「日本人も韓国人も関係ない」という発言は筆者の考えを後押しした．Ｙ氏とＺ氏の生活史を探り，民族関係の結合関係の可能性について考察を試みることに本研究の意義がある．

1.3　先行研究

1.3.1　研究方法

民族関係の社会学は，今までは質問紙調査にかけるような仮説を索出する段階にあった．研究方法はフィールドワークが中心となり，それと並行して生活史法や世代間生活史法が用いられてきた．

1.3.2　研究成果

「サイズ理論」

一般的に，異民族同士が結合関係を築くのは難しい．これに関して，H．ブレイラック(1967)は，「サイズ」のマイナス効果を指摘する．具体的には，アメリカ社会における黒人人口の量・密度の増大が白人に経済的・政治的脅威をもたらし，それによって差別・偏見が助長されるというものだ．これは「サイズ理論」と呼ばれ，民族関係の社会学では定説となっている．

「剥奪仮説」

谷(1992)は，大阪市生野区を中心としたフィールドワークの結果，「剥奪仮説」を提唱した．剥奪仮説とは，「本来自らに備わっているべき価値が剥奪されている場合，その価値を奪還するために民族と民族が結合して状況に立ち向かうことをいう．言い換えれば，相互に協力し合わないことには共倒れになってしまう状況下において，ようやく民族間の結合関係が成立する」（谷　1992:279-80 ）．こうした例は，地域福祉活動，PTA活動，地元商店街において見られたものだった．

「バイパス結合」

その後，谷とその研究グループは，1993 年 9 月から 1998 年 5 月にかけて在日韓国・朝鮮人家族を対象にした世代間生活史調査を行った．これにより，谷は「生活構造の中の民族以外の地位－役割関係 (例：職業ほか) をバイパスして民族間の顕在的結合関係に至るルート」(谷　2002:200) を指摘した．また，谷は剥奪仮説に対して「バイパス結合という，より高次の結合原理が背後で作用していた」(谷 2002:721) という考察を加えている．

以上、大雑把に民族関係の社会学の研究成果を展望した。明らかなことは，民族以外の地位役割関係においては民族関係の結合関係が見られるということだ．

1.4　調査枠組み

本論文でも民族関係の結合関係の可能性について考察を試みるのだが，その際，近所づ

き合い等の「自由な個人同士の民族関係」については，基本的には考察の対象外とした．「自由な個人同士の民族関係の成立はむしろ容易といえる」（谷　2002:18 ）からだ．

2　方法

2.1　調査対象者

「在日韓国・朝鮮人」と聞くと強制連行を思い浮かべる日本人は多いだろう．しかし，それは在日韓国・朝鮮人の歴史の一部であり全てではない．金賛汀（ 1985 ）によると，生野の在日韓国・朝鮮人社会の歴史の場合，強制連行という要因はあまり見られない．

1922 年に済州島－大阪間に定期航路が開かれ，親戚や同郷出身者のつてで多くの済州島出身者が大阪へ渡ったのだ．この流れは 1945 年の日本敗戦から 1965 年の日韓条約まで密航という形で続いた． 1965 年以降，密航の取り締まりは厳しくなった．

Y 氏と Z 氏も密航で大阪に来た在日韓国人だ．来日当初から大阪市生野区に居住している．出身はY 氏が済州道「テジャンミャン」村， Z 氏が済州道「モシュポ」村．「テジャンミャン」村と「モシュポ」村は隣同士だ．職業はヘップサンダルの職工である． Y 氏は現在引退している．日本への同化については， Y 氏にはその傾向が一切見られない． Z 氏は，名前は日本名を使用しているが，それ以外には見られない．間接的には， Z 氏の次女は日本に帰化している． Y 氏には 5 人の子ども（ 3 男 2 女）がいて，このうち 2 男は日本人と結婚している．このため，日本人家族とも付き合いがある． Z 氏には 4 人の子供（ 1 男 3 女）がいて， 3 女は日本人と結婚している．長男は未婚である． Z 氏も日本人家族と付き合いがある．

飯田剛史（ 2002 ）によると，生野の在日韓国超世人社会には，親戚や親族，また同郷出身者同士の相互扶助組織があるのだが， Y 氏と Z 氏はあまりその恩恵に与ることがなかった．特にY 氏の場合，「テジャンミャン」村から生野に来る者はほとんどいなかったようで， Y 氏の同郷出身者を「姉以外見たことがない」． Z 氏によると，「モシュポ」村からも戦後はあまり来なかったようだ．

2.2　生活史法（ライフ・ヒストリー法）

生活史法は仮設を索出するために行うインテンシブな社会調査である．作業の流れとしては，まずは調査対象者に生まれてから今日までの人生を語ってもらい，それをヴォイスレコーダーで録音する．次に録音された物を逐語的に文字化し，最後に編集を施す．

生活史法の共通理解は以下の 10 項目にまとめることができる.

(1) 生活史法は，個人の生活構造 (あるいは生活世界) に焦点をあてる.

(2) 生活史法は，異文化を対象とし，それを人間行動の動機に遡って内面から理解しようとするとき，より効果を発揮する.

(3) 生活史法は，人生の一時期，あるいは一生，さらには世代を超えた生きざまをも対象とし，そこで展開される生活構造の変遷や，世代間の文化の継承・断絶などを長いタイム・スパンで探求する.

(4) 生活史法は，個人のみならず，マクロな組織，制度，システムも視野に入れ，個人史と社会史，主観的世界と客観的世界，これらの連動関係を把握しようとする.

(5) データとしての生活史には代表性や客観性が欠けるとの批判があるけれども，個別を通して普遍にいたることは可能であり，個性記述の蓄積を通して類型構成への道が開かれている.

(6) 生活史法などの質的データと量的＝統計的データとの相互補完によって，より豊かな研究成果を生み出すことができる.

(7) 生活史調査の成否は，調査対象者とのラポール (信頼関係) にかかる部分が大きい.

(8) 生活史調査では、調査者と調査対象者との長時間にわたる双方向的なコミュニケーションがおこなわれるので，そこでは自らの語りで自らを癒し (カタルシス) ，自らの生の意味づけを確認する (自己反省) ，といった事態が生じうる．同時に，調査者自身の自己反省の機会ともなりうる.

(9) 生活史調査は，マイノリティ・グループの声をすくい上げられる.

(10) 生活史調査によって得られた結果の公表にあたっては，プライバシーが侵害されることのないよう，調査対象者を匿名・仮名で表すなど，倫理的観点からの慎重さが要求される．(谷 1996:iii - iv)

3　戦後来日した在日韓国人女性の生活史

インタヴューは，Y 氏は 6 月 22 日と 10 月 22 日に，Z 氏は 6 月 15 日と 11 月 2 日に，それぞれ生野区内の喫茶店で行った.

3.1　生活史の背景

3.1.1　ヘップサンダル

ヘップサンダルは，生野の主要な産業であり，主要な担い手は生野に暮らす在日韓国・

朝鮮人だ.

谷（ 1989 ）によると，大阪全体にはサンダル会社の同業組合が３つあり，そのうちの２つは生野とその周辺の企業で結成したものである．１つは，在日韓国・朝鮮人が経営する会社約 60 社と日本人が経営する会社極少数が結成した組合で，もう 1 つは日本人が経営する会社約 20 社が結成した組合である．会社の数としては，在日韓国朝鮮人が経営する会社の方が日本人が経営する会社よりも約 40 社多い．そして，各社が下請け，孫請けをもっている．ヘップサンダルの製造工程は 15 ほどに分かれていて[1]，その 1 つ 1 つが異なる下請け，孫請け職人によって専門的に分業されている.

Y 氏と Z 氏の工場が扱った工程は圧着・検査及仕上・箱詰で，Y 氏によると「一番大切」な工程だった.

注[1]生地－糊引－裁断－ミシン縫製－張加工－圧着－検査及仕上－箱詰がおおよその流れである.

3.1.2　頼母子講

頼母子講は互助的な金融組合で，組合員が一定の掛け金をなし，一定の期日に抽籤または入札によって所定の金額を順次に組合員に融通する組織のことだ．頼母子講は韓国・朝鮮では契（けい）とよばれている．契は朝鮮の伝統的な相互扶助組織で，李朝末期に農民による納税対策として盛んになり，村の共同事業や，家庭生活，事業経営などに欠かせない金融組織となった．現在も韓国の都市部では女性の契が盛んであり，韓国における制度金融の発展を阻害する要因にもなっている（『朝鮮を知る事典』）.

契は，生野の在日韓国・朝鮮人社会では「頼母子」とよばれ，在日韓国・朝鮮人女性特有の相互扶助組織として盛んにおこなわれてきた.

3.2　Y 氏の生活史

韓国時代

Y 氏は 1936 年，韓国済州島「テジャンミャン」村に 7 人兄弟の 3 女（ 6 番目）として生まれた．両親は農業を営んでいた．Y 氏が生まれた当時，日本は 15 年戦争の真っ只中にあり，「テジャンミャン」村には旧日本軍が駐屯していた．尚，旧日本軍は済州島全域に駐屯していたのではなく，「テジャンミャン」村と Z 氏の出身地である「モシュポ」村を中心に駐屯していたようだ．「テジャンミャン」村の旧日本軍はとても横暴で，「年

貢」と称して村の食糧を「根こそぎ」奪っていた．そのため村民は「納めた残りくず拾って食べるようなもん」だった．旧日本軍に射殺される村民も少なくなかったという．Y氏は「日本人ゆうたらすごく恐さがあった」と語る．「農業を食いものにする．頑固で，自分の思ったことずばりずばりするのが日本人」というのが子供の頃のY氏が持つ日本人像だ．

Y氏は子供の頃学校には通っていない．「女は勉強しないのが普通」だった．「それでも，うちはものすごく勉強したかった」と語るY氏は父親に隠れて「夜間学校」に通った．そこでは「男の先生が字の読み書きとかを教えてくれた」．しかし，父親に見つかると夜間学校にも通えなくなった．

日本の敗戦後も， 1948 年には済州島四・三蜂起が起こり，混乱は続いた．Y氏は自らの韓国時代を振り返り，「私，生まれて韓国でろくな生活してない」と結んだ．

来日

Y氏は来日の理由について次のように語った．「子供の頃はそんな風に（日本人は恐い）と思ってたけど，大きくなって大人になったら人間生き方も覚えてくるし，ちょっと外に出ようゆう気持ちが出てくるわけ」．

Y氏は 18 歳のときに結婚し翌年には長男を出産した．「生活は苦しかった」が「農業だったから食べていけないことはなかった」．一方で「日本行こうゆうもやもやした気持ち」もあった．転機は 20 歳のときだった．夫が漁の最中に台風でそうなんしてしまったのだ．これがY氏が日本へ行くきっかけとなった．生野で姉が暮らしていたこともあり，家族で反対する人は 1 人もいなかった．皆，「日本行って気持ち落ち着かせてきたらいい」と言ってくれた.Z氏は「日本行って 2， 3 年社会勉強しようゆう軽い気持ち持って」日本へ行くことを決めた．長男は済州島に残すことにした．

Y氏は密航で済州島の西帰浦から日本へ向かった．かかった費用は 7 万円だった．その当時は「ふろ賃 12 円」で， 7 万円といえば「一生の大金」だった．それを用意したのは生野に住む姉だった．姉は頼母子講のお金を下ろして 7 万円を作り出した．

後悔の日々

生野へやってきたY氏は，姉とその家族が暮らす家に居候させてもらい，日本での生活をスタートさせた．「 社会勉強 」が目的だったが，たちまち後悔の念に襲われてしまう．

「（韓国に）帰ろうと思っても簡単に行けない」現実を知ったためだ．Ｙ氏は，密航には莫大な費用がかかるため，強制送還で韓国へ帰ることを考えていた．しかし，警察に自首すれば簡単に送ってもらえると考えていたＹ氏は，強制送還の船が収容者が定員に達しない限り出ることはなく、それまでは刑務所に入っていなければならないことを知り、自首する勇気がなくなってしまったのだ。

それでも，「子ども会いたさで帰りたい」気持ちは強くなる一方で，「刑事が自分に声かけてくれへんかなあ」と，交番の周りを「うろうろ」する日々がしばらく続いた．しかし，Ｙ氏が声をかけられることは１度もなかった．

日本での生活を決意

日本に来たことを後悔していたＹ氏だが，生野に来てからの最初の３年間，交番の周りを「うろうろ」してばかりいたわけではない．姉に７万円を返すために仕事もしていたのだ．Ｙ氏がまず手にした仕事は，当時流行していた「抱っこちゃん人形」を作る内職だった．この仕事を１年間続けた後，「家に閉じこもってばかりいないで外に出てみたら」という姉の勧めで，今度は姉の家の近くにあったヘップサンダルを作る工場に働きに出るようになった．在日２世の韓国人女性が多く働く工場だった．

Ｙ氏は，姉の家では韓国語しか使わず，生野に来てから覚えた日本語は「はい，わかりました」だけだった．工場では日本語ばかりが飛び交っていたため，最初は全くついていけなかったＹ氏だが，「しょっちゅう耳を傾け」るうちに「言葉もわかってくるし，道もわかってくる」ようになった．また，ヘップサンダルの仕事は，農業に比べ収入が安定していたため，Ｙ氏の生活は「農業するよりも全てが豊になって」いった．

最初の１年間こそ生野に「なじめなかった」Ｙ氏も，日本語を覚え，「生活も楽になって」，生野が「すみやすいなあ」と心境の変化が見られるようになった．ちょうどその頃，25歳の時に，同じ済州島出身の韓国人男性と再婚をし，４人の子どもを次々と出産していった．４人目（通算５人目）の子どもを出産した時，Ｙ氏は33歳になっていた．その頃には，「国へ帰る気持ち」が完全になくなってしまったという．「今さら国へ帰っても，この子ら食べさせていけない」という心理も働いたのだろう．

「自分１人」

再婚を果たしたＹ氏だが，それにより却って生活は貧しくなっていた．子どもが次々産

まれたことも理由の１つではあったが，最も大きな理由は，夫が全く働かず遊んでばかりいたことだった．Ｙ氏は夫に「散々苦労させられた」のだが，これはＹ氏に限った話ではなかったそうだ．夫に楽をさせてもらう在日韓国・朝鮮人女性は「珍しい」という．Ｙ氏によると，「女を持ち上げて，その気にさせて働かせて，自分はその金で遊ぶ」のが典型的な「済州島の男」だという．要するに「ズボラ」なのだ．

Ｙ氏の夫は，生野で頼れる親戚が１人もなく，「裸一貫」で生野に来た．新聞配達で生活をしながら日本の高校を卒業したものの，その後はあまり真面目に働かなかったようだ．結婚後は「１円も」稼がないどころか，家の金を持ち出しては麻雀に明け暮れる毎日だった．Ｙ氏は，遊んでばかりいる夫に早々と愛想を尽かし，「全部１人でやってきた」のだった．

頼れる親戚や同郷出身者がいなかったことも，「誰も助けてくれへん．自分１人やし」という気持ちをＹ氏が持つに至る大きな要因だった．生野にいるＹ氏の親戚は，夫の親戚を含めても姉とその家族ぐらいだった．「姉一家も食べていくのがやっと」の状況だったし，姉には密航の際に既にお世話になっていて，これ以上頼る気持ちはなかった．同郷出身者に関しても，済州島という広い意味での同郷出身者は多数いたわけだが，「同じ村から来た人」という点では，姉を除けば「出会ったことがない」のであり，「島の反対側から来た人ばかり」だった．済州島出身の友達からも「よう来たなあ」と言われるほどだ．「島の反対側」から来る在日韓国・朝鮮人は「兄弟 5,6 人で来る」ことが多く，また，村単位で同郷親睦会を作るのが普通だった．インタヴューを通じて，Ｙ氏自身も「裸一貫で来た」ことを強調するのはこのためだろう．

仕事

Ｙ氏は，来日２年目から６５歳の時まで一貫してヘップサンダルの仕事に励んできた．とても手先が器用で，最初に勤務した工場でめきめきと頭角をあらわし，２年後，結婚する際に，その工場の社長に「あんたならやっていける」と強く背中を押してもらい，独立して自分の工場を持った．

Ｙ氏が取引相手として選び続けたのは日本人が経営する会社だった．独立する際，後押ししてくれた社長が，「付き合うなら日本の会社がいい．（在日）韓国人の会社は後でもめることが多いから」と，日本人の会社と取引することを強く勧め，日本人の会社を紹介してくれたのだ．Ｙ氏と日本の会社の出会いは偶然だったが，Ｙ氏が日本人の会社と取り

引きを続けた理由は，日本の会社と在日韓国・朝鮮人の会社をＹ氏なりに計りにかけて選択した結果だった。最初に勤めた工場も日本人の会社と取り引きをし，成果を上げていたため，その工場の社長の忠告にはそれなりの説得力があったことがまず１つ．また，「（在日）韓国人の会社はもめごとが多い」という噂も度々耳にしていた。そして，実際に日本人の会社と取り引きをしていく中で，日本人の会社は「何の疑いもなし，正直に」取り引きできる相手だと実感していたことが，Ｙ氏が日本人の会社を取り引き相手として択び続けた大きな理由だった．

Ｙ氏によると，日本人の会社と取り引きをする工場は少なく，在日韓国・朝鮮人の会社と取り引きをする工場が多かったという．大抵は，「意地」で日本人の会社と取り引きをしなかったようだが，中には，日本人の会社との取り引きを望んでも，日本人の会社が取り合ってくれないケースもあったようだ．「きっちり」仕事をする限りにおいては特に問題はないのだが，欠陥による返品が重なると「仕事がこなくなってしまう」のだ．裏を返せば，Ｙ氏はそれだけ「きっちり」仕事をしていたということだ．Ｙ氏は常時 4,5 人の職人を雇っていたが，最後の点検の工程だけは他の職人には任せずに，全て 1 人でこなした．不備があったときは，「１人で一からやり直した」のだ．そこまで「きっちり」した理由は返品を出したくなかったからだ．返品が重なると仕事がこなくなる．それがＹ氏には「ものすごく恐ろしい」ことだった．なお，Ｙ氏は 1 度も返品を出すことがなかった．

Ｙ氏の仕事ぶりは日本人の会社から高く評価されていた．それにまつわる話をＹ氏がしてくれた．Ｙ氏が独立してから 7 年か 8 年が経ったある日、工場に 1 人残って箱詰の作業をしていたときのこと．Ｙ氏とは取り引きのない日本人の会社の社長が工場に訪れ，挨拶もそこそこに世間話を始めた．「おかしな人やな」と思いながらも，「失礼だから」と作業を止めると，「手は止めずに」と先方は言ってくる．Ｙ氏は「耳だけ傾けながら」作業を続けた．箱詰めは単純作業だが，ただ詰め込めばいいものではない．指定された箱に指定されたサンダルを，向きをそろえ，左右逆にならないように詰め込まねばならない．サンダルを入れ間違えたり雑な入れ方をしていると，クレームにつながり，それまでの努力が水の泡になりかねない．箱詰めは決して気の抜ける工程ではないのだ。Ｙ氏は「おかしな」日本人社長の相手をしながら，器用にすばやく箱詰めをこなしていった．箱詰めが終わると，それまで世間話ばかりしていた日本人社長が突然，「Ｙ氏は本当によく仕事ができる．噂以上や」と取り引きを申し込んできた．Ｙ氏の仕事ぶりは日本人の会社の間で評判になっていて，噂を聞きつけたこの日本人社長はそれを確かめに工場に足を運んだのだ

った．世間話をしながらも，Ｙ氏の仕事ぶりを「じっくり見ていた」のだ．Ｙ氏はこの話をしている間とても嬉しそうだった．

Ｙ氏は計 4 つの日本人の会社と取り引きをしてきた．取り引きがなくなるときには，前の会社が次の会社を紹介してくれた．それだけ，Ｙ氏と日本人の会社の関係は深かったのだ．Ｙ氏と子供 4 人が外国人登録証を取得するときにも，日本人の会社の社長が保証人になってくれた．それまでは，夫が外国人登録証を持っていたので，「いらないだろう」と思っていたのだが，Ｙ氏が 40 歳のときに夫がなくなると急に不安になってきた．長女は日本の高校へ進学することを希望していたし，長男と次男はやんちゃ盛りで，「万が一警察のやっかいになることもあるだろう」．外国人登録証がないと「後がごちゃごちゃするかもしれない」と考えたＹ氏は日本人社長に相談したのだ．すると，この日本人社長は「Ｙ氏を韓国に返すわけにはいかない」と快く保証人になってくれたのだった．

Ｙ氏は，ほんの 2,3 ヶ月だけだったが在日韓国・朝鮮人の会社とも取り引きをしたことがあった． 90 年代に入り日本が不景気になると，日本人の会社は台湾や中国に仕事を回すようになり，Ｙ氏の工場にはほとんど仕事がこなくなったためだ．Ｙ氏としては「思い切って」在日韓国・朝鮮人の会社と取り引きをしてみたのだが，「話が通じなかった」という．この点に関してあまり詳しくは語ってもらえなかったのだが，「ごちゃごちゃするのは本当」だった．ちょうどその頃，在日韓国・朝鮮人が運営する，在日韓国・朝鮮人の高齢者のための福祉団体が，活動の拠点とするための空き部屋を探しているが中々見つからなくて困っていることをＹ氏は耳にした．話を聞いてみると，「ちゃんと家賃は払う」とのことなので，工場をたたみ，その福祉団体に使ってもらうことをＹ氏は決めた．こうしてＹ氏は仕事を引退した． 65 歳のときのことだった．毎月支払われる家賃を「年金」として受け取りながら，現在は「隠居生活」を満喫している．

工場の運営は順調だったが，職人との関係は別だった．雇う職人は，皆在日韓国・朝鮮人だ．職人の入れ替わりは激しく，最も長くいた人でも 4 年間で辞めてしまった．理由は職人同士の喧嘩だった．「言葉の齟齬」がもとで喧嘩になることが多く，「必死になだめる」のだが，大抵はそのまま辞めてしまうのだ．「仕事の雑な人」に関してはまだ諦めもつくのだが，「ゆっくりでも丁寧な人」には「何とか残ってもらおう」と説得を試みた．それでも，引き止めることはできなかった．

子供の教育

Ｙ氏の子育てにかける情熱は並々ならぬものがある．子供の頃勉強することができなかった悔しさは，韓国にいるときは感じなかったが，日本に来てみると字が読める人ばかりで「ものすごく悔しい思い」がうまれ，「その分子供たちには命かけよう」という気持ちを強く持ったのだ．そのため，子どもが「勉強したい」と言えば，惜しみなくサポートした．具体的には，学費の心配をさせなかった．Ｙ氏の子供は４人とも日本の高校を卒業．さらに，長女と次女は韓国の大学を卒業，次女はイギリスの大学へ留学もしている．Ｙ氏はこれらの学費と韓国とイギリスでの子どもの生活費の全てを工面したわけだ．

Ｙ氏は，もし韓国に残っていたら，子どもの教育に，特に娘の教育に「ここまで一生懸命できなかった」と振り返る．韓国では女性に対して高等教育を与えないのが「普通」で，もし韓国に残っていたら「人の目」が気になってしまい，娘を大学に行かせることができなかったかもしれないからだ．

「銀行と勝負」

Ｙ氏は子供の教育費を銀行からの借金で工面してきた．これが，Ｙ氏と同年代の在日韓国・朝鮮人女性をして「姐さんは珍しい生き方してる」と言わしめる最大の理由だ．生野で暮らす在日韓国・朝鮮人女性は頼母子講に入るのが一般的で，お金のやり繰りは全て頼母子講で行うものだった．しかし，Ｙ氏は１度も頼母子講に入らなかった．頼母子講には「ものすごく恐さがあった」ためだ．頼母子講は生野の在日韓国・朝鮮人女性の相互扶助組織として知られるが，トラブルも多かったようだ．例としては以下に挙げるものが代表的だった．＜親＞が＜子＞から預かったお金の運営に失敗し，＜子＞に責められ自殺してしまう例．＜親＞が＜子＞から集めたお金を持ち逃げしてしまう，あるいは，そのお金をそのまま自分のものにしてしまい，強引に示談にしてしまう例．借金の返済が滞った＜子＞が執拗な嫌がらせをうける例．こうしたトラブルが「しょっちゅうあった」ため，Ｙ氏は頼母子講にお金を預けることができなかった．Ｙ氏によると，「頼母子で他人に食わして（他人を犠牲にして）大きくなったゆう人はようさんいてる」という．筆者が「まるでギャンブルですね」と口にしたところ，「そう．ギャンブルみたいなもん」という返事が返ってきた．Ｙ氏の話をまとめると，頼母子講は「貧しい人」にとっては大切な相互扶助組織だが，「お金持ち」にとってはさしずめマネーゲームといったところだ．

Ｙ氏と銀行との出会いは夫がなくなったときにまで遡る．夫が銀行に多額の借金を残していて，銀行がＹ氏宅を差し押さえにきたのが最初だった．このとき，Ｙ氏は「銀行はお

金貸すとこと違いますか」と訴え，毎月利子を支払うことを条件に差し押さえを回避した．こうして，Ｙ氏と銀行の取り引きが始まった．そのうち，Ｙ氏はあることに気が付いた．それは「銀行は，きちんと利子を支払っとったら電話も１本もよこさない」ということだ．これは頼母子講では考えられないことだった．Ｙ氏は「銀行は信用できる」と考えるようになった．

長女の進学でお金がいるようになったとき，Ｙ氏は銀行に「お金を貸してほしい」と頼んでみた．すると，そのときの貸し係長は「Ｙ氏はきちんと返してくれるから」と，まだ夫の借金が残っていたにもかかわらず貸し与えてくれた．この日からＹ氏と銀行の「勝負」が始まった．睡眠時間を 1 日 2 時間に削り，「100 日 1 日も休みなく」働いて，毎月の利子を支払い続けた．Ｙ氏が「うちと銀行と勝負や」と力強く語っていたのが筆者には印象的だ．肉体的にはハードな毎日だったが，精神的には，「これで頼母子やらんでええ思ったらものすごく気が楽」だった．

貸し係長は「Ｙ氏は裏切らない」と，すっかりＹ氏を信用するようになっていた．貸し係長が変わったときに少し問題が起きた．いつものように融資の相談に行くと，担保と保証人を要求されたのだ．担保には自宅と工場を充てていたから問題なかったが，保証人となるとどうすればいいかわからない．「娘じゃだめですか」と相談したところ，「ダメだ」と断られてしまった．しかし，結局この日のうちにＹ氏の元にはお金が届けられた．以前の貸し係長が「Ｙ氏みたいな人逃してどんな人見つかるの」と，不審に思い説明を求めに来たこの貸し係長を叱りつけ，「すぐ貸しなさい」と命じたからだった．この一件を話しているときのＹ氏の表情はとてもほころんでいた．これ以降，Ｙ氏は保証人なしで銀行から融資を受け続けた．

以上見てきた銀行は，韓国系の銀行だ．現在，Ｙ氏は郵便局にもお金を預けている．以前は日本の銀行にも預けていた．尚，日本の銀行が保証人なしでお金を貸してくれることはなかった．

付き合い

Ｙ氏は，対人関係について，「付き合いといえば仕事の付き合い」と語るものの，それ以外にも，約 10 人のラジオ体操仲間，済州島会，近所づき合いといったものがある．ラジオ体操仲間はほとんどが済州島出身の在日韓国朝鮮人だが，朝鮮半島出身者の在日韓国・朝鮮人と日本人も 1 名ずついる．ラジオ体操の後は喫茶店でモーニングを食べる仲

だ．済州島会は 1 世の在日韓国・朝鮮人が参加する会だ．Y 氏は仕事を辞めた後，この会が企画する海外旅行に参加しオーストラリア・トルコ・ヨーロッパ・中国旅行を経験している．近所づき合い在日韓国人との付き合いが中心だが，日本人とも物々交換をするという．

「私，生まれて喧嘩したことない」．これはＹ氏の口癖だ．裏を返せば，生野に住む在日韓国・朝鮮人同士，喧嘩が多いということだ．尤も，「次の日にはけろっとしていることの方が多い」のだが，そうはいかない場合もある．頼母子講におけるトラブルのように金銭が絡んだ場合がそれだ．Y 氏は「後がごちゃごちゃするのが嫌」なので「お金の付き合いは一切しない」ことにしている．

Y 氏の工場では従業員同士の喧嘩が跡をたたなかった．突然，「１ヶ月だけ働いて辞めます」と言われると「むっ」としたが「うちが我慢したらそれで済む問題やから．うちが買った人間じゃあるまいし」と割り切り，相手の好きなようにさせてきた．Y 氏がそのように割り切れるようになったのはいつ頃からなのか尋ねてみると「さあ．生まれたときからと違う．うちはそこぬけやから」という返事が返ってきた．

夫の存在

Y 氏の夫（２人目）は「どうしようもない済州島の男」だったが，Y 氏のよき理解者だったのかもしれない．夫は亡くなる前にこう言いのこした．「おまえは勉強しなくてよかった．お前は頭が切れすぎる．気も強い．お前が勉強する人やったら，足を引っ張る人間がようさんいてた」．

3.3　Z 氏の生活史

韓国時代

Z 氏は 1937 年，７人兄弟の次女（４番目）として韓国済州島に生まれた．父は「日本と韓国を行ったり来たりする仕事」をしていて，母は農業を営んでいた．村では「一番大きな家」で，戦時中も食べるのに困ることは一切なく，それどころか，他の貧しい村人に食糧を分け与えるほどだった．この村にも旧日本軍が駐屯していたが，大変規律がとれていたようだ．「年貢」と称して食糧を取られることもなかった．

Z 氏も学校には行かせてもらえなかった．Z 氏はその理由として次の 2 つを挙げる．1 つは「女が勉強すると家が滅びる」という迷信を両親が頑なに信じていたため．もう 1 つ

には，Ｚ氏が病弱で「兄弟の中でも一番おとなしかった」ためだ．日本の戦争が終わると，女性も学校に通える時代が韓国にもやってきた．このとき，Ｚ氏は学校に通える年齢に含まれていたが，通わせてもらえなかった．Ｚ氏は，自分は「あの子は早よ死ぬ」と両親から思われていたに違いないと振り返る．尚，Ｚ氏の 2 人の妹は学校に通っている．

来日

Ｚ氏の村から生野へ渡った人は，戦前は若干いたようだが戦後はほとんどいなかったという．しかし，Ｚ氏の兄と姉，そして叔母（母の妹）の 3 人は既に生野で生活していた．Ｚ氏も幼少の折から日本に行きたいと思っていた．理由は 2 つあった．1 つは「外に出て日の光を浴びるのがものすごく嫌」だったからだ．「日本行けば家の中で働ける」と聞いていたＺ氏は日本に憧れを持つようになっていた．もう 1 つの理由は，「日本行けばお金儲けできる」と聞いていたからだ．Ｚ氏は，「日本行って喫茶店か何かしよう」という夢を持つようになっていた．

Ｚ氏が日本に行くことに反対する家族は誰 1 人いなかった．しかし，「病弱やし，気が弱いからすぐに帰る」と思われていたようだ．Ｚ氏は「２度と帰らへん」と心の中で誓って済州島をあとにした．このときＺ氏は 22 歳だった．密航の手配はすべて生野にいた叔母が整えてくれた．この点は，Ｙ氏に比べ恵まれているといえるかもしれない．

楽しかった 3 年間

叔母は生野でベルト工場を営んでいた．大きな工場で，アメリカの会社とも取り引きをしていた．また，従業員には日本人男性もいた．Ｚ氏は，生野に着くと早速この工場で働くようになった．姉もこの工場で働いており，住居も姉と一緒だった．休日になると，姉と日本人男性らが生駒，奈良，大阪城，橋幸夫のショーなど「色んな所」に遊びに連れて行ってくれた．生野に来てからの 3 年間はＺ氏にとって「一番楽しかった」ときだった．

結婚と絶望

Ｚ氏が結婚するのは来日 4 年目，26 歳のときのことだ．Ｚ氏の夫の父親，つまり義父がＺ氏の仕事ぶりを見てほれ込み，叔母に「長男の嫁に」と結婚を申し込んだのがきっかけだった．叔母はＺ氏に結婚の話をもちかけるが，Ｚ氏は何度も断った．「ようやく言葉も覚えてきたし，ものすごく遊ぶのが好きやったから」，結婚に縛られたくなかったの

だ．しかし，結局は「年いったおばさんたちに負けて」結婚することになる．

夫は在日韓国人 2 世で生まれも育ちも生野だ．夫の両親はともに済州島出身で，生野で鉄工所を営んでいた．夫の実家は金回りがよく，家政婦を雇っていたし，夫を東京の大学にまで進学させていた．しかし，夫は大学を卒業したのち遊んでばかりいた．実家に戻ってからも鉄工所を手伝うことはなくひたすら遊んでいた．そして，結婚後も働くことはなくひたすら遊び続けた．

Z 氏は結婚を機にベルト工場を辞めていた．大卒の夫に対する遠慮があり，夫を「侮辱したみたいになる」からだった．そのため結婚生活は，最初は Z 氏の貯金を崩しての生活となった．貯金が尽きても夫は働く気配を見せないので，Z 氏は義父に借金を頼むことにした．しかし「そんな甘えではあかん」と断られてしまう．困り果てた Z 氏は姉のもとへ相談に行き，花飾りをつくる内職を紹介してもらうが，結婚の翌年に長女が産まれると内職だけで食べていくのは不可能となった．そんな折，夫が突然「事業を起こす」と言いだした．そのためには資金がいるというので，Z 氏は夫の親戚中を訪ね歩き融資を頼んで回った．しかし，行く先々で「（夫）は自分でするゆう気持ちない人だからできへんし，苦労したことないし，責任感もないから信用できへん」と言われ，融資を断られてしまう．結局，夫は遊ぶ一方で，「これではやっていけない」と思った Z 氏は，最後の切り札として兄を頼った．Z 氏は「やっぱし日本へ行かない方がよかった」と身内に笑われたくなかったので，極力兄を頼りにしたく中ったのだ．兄のもとへ相談に行くと，ヘップサンダルの仕事を勧められた．Z 氏は兄の工場でヘップサンダルの仕事を覚え，自宅の 1 階を工場に改装して生計を立てていく．

義母は Z 氏にたいして「意地悪」だった．義母に話題が及ぶと Z 氏の語気はとても荒くなり，筆者が話題を変えても度々義母の話に戻されてしまった．Z 氏は義母に軽蔑されていた．義母だけでなく，夫の兄弟の嫁，つまり義妹（1 人は在日韓国人 2 世，1 人は日本人）からも軽蔑されていた．日本語の読み書きができないことを罵られることもあった．本論文のインタヴューを通じて，筆者は 1 度だけ「差別」という言葉を耳にしたが，それは Z 氏が義母に向けて発したものだった．筆者は，日本人との関係の中で「差別」が出てくることは予想していたが，在日韓国・朝鮮人との関係の中で「差別」が発言されるのはまったく予想外だった．

Z 氏は「お金貸して」と頼まれると断れない質だった．過去に計 4 人の在日韓国人に金銭を無心されている．額は 1 人につき 5 万から 10 万を超える場合も合った．そして，誰

１人として返してくれなかった．結婚してから 10 余年あまりはＺ氏にとって最も辛い時期だったのだろう．この頃のＺ氏は「どうして私１人こんな目にあわなあかんのやろう．韓国ではもっといい暮らししてたのに」と毎晩泣いていた．

「強なる」

Ｚ氏は「 40 になって強なった」と言い切る．Ｚ氏は 40 歳のときに体調を崩すのだが，これが「強なる」１つのきっかけとなった．入院しなければならないほどの病状だったが，夫と４人の子供をささえる身のＺ氏としては入院するわけにはいかず，毎日通院することを条件に入院を免れた．このとき以来，Ｚ氏は「自分がしっかりせんといけへん」と強く思うようになった．長男（４番目）の小学校入学とも重なり，「うちがしっかりせえへんかったらこの子らどうなる」と思ったのだった．それまでは，夫や義母や義妹やその他の知人に対して「人（Ｚ氏）を馬鹿にしてっていうのがものすごくあった」が自分の感情を表に出すことはなかった．しかし，このとき以降「ものすごくあつかましくなった」．また，「 40 過ぎてからものすごく根性変わった」のは「主人のお母さんがいじめたのが逆に役に立った」からでもあった．

仕事

Ｚ氏は兄にヘップサンダルの仕事を教えてもらってから現在に至るまでヘップサンダルの仕事を続けている．最初は兄が取り引きする在日韓国・朝鮮人の会社から仕事を分けてもらっていた．Ｚ氏はこの会社に満足できなかった．あまり仕事をくれなかったからだ．Ｚ氏はもっと仕事をくれるよう頼んでみたが応じてもらえず，結局この会社との取り引きは２年で終わった．次に取り引きしたのも在日韓国・朝鮮人の会社だったが，この会社はＺ氏の仕事ぶりを高く評価していた．どの工場よりも真っ先にＺ氏の工場に給料を支払ったという．この会社の社長は「Ｚ氏を頼りにしてる」とよく言ってくれた．この会社との取り引きは 10 年以上に及んだが，この会社が事業をサンダルから靴へと変える方針を出してから自体が変わった．会社は今後は靴を作るよう要求してきたが，Ｚ氏は断った．会社は「機材を揃えるのにいるお金は全部貸すから」と言ってきたがＺ氏は再度断った．最後には社長が直々に頼みにきたのだが，Ｚ氏は「申し訳ないけど」と言って，最後まで断り続けた．要するに，Ｚ氏はこの会社を取るのかヘップサンダルを取るのか二者択一を迫られて，ヘップサンダルを取ったわけだ．Ｚ氏がヘップサンダルにこだわったのはサンダ

ル職人として自信があったことと，当時ヘップサンダルの需要はいくらでもあったからだ．こうしてＺ氏は日本の会社と取り引きするようになった．その後，また別の日本人の会社と取り引きを始め，現在もその会と取り引きしている．

Ｚ氏に日本人の会社と在日韓国・朝鮮人の会社の違いについて聞いたところ，「特にない」という返事が返ってきた．「色々注文をつけてくるのはどこも一緒やし，いちいち文句を言ってはやってられへん．仕事が厳しいのは当たり前」ということだ．筆者にはＺ氏の職人魂が見えた気がした．

Ｚ氏の工場には，「景気のええとき」には４，５人の職人がいた．皆，在日韓国・朝鮮人だ．職人同士の仲は概ね良かった．「喧嘩なんかさせへん」とＺ氏は語る．しかし，過去２人の職人を解雇している．「真面目にしないし，言ってもわからん人やったから」だ．その中の１人は１ヵ月後に泣いて謝りにきた．新しい工場でいじめにあったそうだ．その後，この職人は真面目に働くようになった．

「勉強はできへんでも仕事はきっちりするゆうのがある」．「仕事では後ろ指さされんようにやってきた」．これらはＺ氏の口癖だ．Ｚ氏は毎朝５時に起き，他の職人が働きやすいよう下準備を行うのを怠らなかった．また，「字が読めんでも馬鹿にされへんように注文は全部丸暗記してきた」．「みんな（ほかの職人は）学校行ってる人なのに，全部うちに頼ってた」．

子供の教育

「今の親は何でも学校のせいにする」とＺ氏は語る．「学校に文句ばかり言ってもあかん」がＺ氏の持論だ．つまり，自分から動かないといけないというわけだ．Ｚ氏が動くようになったのは長男が小学校に入学してからだ．Ｚ氏が「強なる」時期と重なる．長男は宿題を忘れることが多く，担任によく注意されていた．そこで，Ｚ氏は担任に直接面会し，Ｚ氏が子供の頃学校に行ってないこと，また，そのために長男の勉強を見てあげられないという事情を説明し，「この子のこと見捨てんと長い目で見てやってほしい」と頼んだ．その後，担任は長男をよくフォローするようになった．これ以降，Ｚ氏は授業参観日の度にそれぞれの担任に「この子よろしくお願いします」と頼んで回るようになった．次のようなこともあった．長男が中学３年のときのことだ．長男はラグビー部のキャプテンだった．塾にも通っていたが部活で忙しく，遅刻することが多かった．塾側は迷惑していたようだ．夏休みのある日，長男は塾の講師から「他の人の邪魔になるからもう来ないで

くれ」と言われてしまう．それを聞いたＺ氏は「それはあんまりちゃう．この子は遊んでるんと違う．この子のイスだけは置いてくれ」と塾に頭を下げ，塾講師１人１人に冷えたジュースを配った．

学校とぶつかることもあった．長男の高校受験のときのこと．長男は地元の公立トップ高を志望し，併願として受ける私立高校にも難度の高い高校を選んでいた．一方，担任は「公立か私立かどちらかのランクを下げるように」と言ってきた．これを聞いたＺ氏は「頭にきて」，「この子は遊んでたのと違う．ラグビーやって学校にも色々してきたのにどこからその言葉でてきますの」と怒りをぶつけた．担任だけでなくラグビー部の顧問にも怒りをぶつけた．長男にはそのまま願書を出すよう指示した．結局，長男は公立と私立の両方に合格した．次女の進路をめぐっても学校とぶつかった．次女が高校３年のときの３者面談でのことだ．次女が就職を希望したのに対し，担任は「（次女が希望する企業には）韓国人だからできへん」と言い，大学への進学を勧めた．これに対し，Ｚ氏は「同じ税金払って同じように住んできて，日本人だからとか韓国人だからとかどっから出てくるの．そんなこと言うならこの子就職も何もさせへん」と言い返した．担任が「それでは困る」と言うと，Ｚ氏は「先生困る以上こっちはもっと困る」と言い，そのまま喧嘩別れとなった．結局次女は専門学校へ進んだ．

頼母子講

Ｚ氏は生野に来てすぐ頼母子講に入った．姉と叔母も同じ頼母子講に入っていた．ヘップサンダルの工場を開くのに必要な資金や子供の教育費はすべて頼母子講で調達してきた．長男の大学卒業と同時に一旦は頼母子講をやめたが，知人に「いい頼母子がある」と勧められ，現在もその頼母子講に参加している．

Ｚ氏も頼母子講のトラブルは聞いていた．だが，それで頼母子講をやめようとは思わなかった．その理由は，「トラブルなったりするのは＜親＞の家族に問題があったりするもんやし，うちのとこの＜親＞は大丈夫や思ってた」からであり，「私は自分のすることはちゃんとやって，疑われるようなことは何もしてへん」からであった．筆者は，Ｚ氏は頼母子講について詳しく語ってくれるだろうと期待したのだが，「何にも知らん」の一言が返ってきた．姉と叔母以外に誰が入っているのかも知らなかった．「＜親＞に聞こうとは思わなかったのですか」と筆者が訪ねると，「そんなんやらしいやん」とＺ氏は答えた．Ｚ氏は必要以上には頼母子講に関わらなかったようだ．

Ｚ氏は銀行との取り引きはまったく考えていなかった．「銀行は商売する人が付き合うもんやから」というのがＺ氏の銀行に対する考えだ．

付き合い

Ｚ氏の仕事以外での付き合いとしては近所づき合いが中心だ．ほとんどが日本人だ．他に，夫の遠い親戚とは仲がよく，年に１，２度一緒に温泉にいくという．生野に来てから結婚するまでは同郷出身者の集まりにも参加していたが，夫がそのような付き合いを嫌がったため結婚後は疎遠になってしまった．

Ｚ氏もＹ氏同様「人と喧嘩したことない」が口癖だ．「言ってもわからんかったらその人にはしゃべっても一本線引いて付き合う」という．このような付き合い方をＺ氏がするようになったのは，「日本来て，子供ができて，色んなとこ，学校行ったり保育園行ったり，いろんな人と出おうたり，自分で仕事して，自分がするだけしてあげてもこの人わからん人やなあと，そのときから」のことだった．続けてＺ氏はこう語った．「ほんまに人の家庭に頭から入らへん．人の家庭・家族みんな考え方が違ってくるし，人に言えへんことがいっぱいあるやん．そんなこと知らんと，こう違うか，ああ違うかと言って喧嘩する（在日韓国・朝鮮）人多いの．そんなする人見たら嫌いやから，その仲間には入らない．友達おらんでもな，それでええと」．

夫の存在

遊んでばかりいるＺ氏の夫だが，夫婦仲が悪かったわけではない．むしろ，良いといえる．筆者は夫とも何度か面会している．夫は気さくでユーモラスな方だ．筆者と初対面の折には，約１時間にわたり「遊びのすすめ」を淡々と説いてくれた．その間Ｚ氏は苦笑いをうかべていたと思う．

夫は「（Ｚ氏が）することも止めないしごちゃごちゃも言わない．自分で判断して自分で結論だしたらいいと言ってくれる」．そして，Ｚ氏はこう語った．「自分（夫）が色々やってしまったら，うちがだめになると思っとったんと違う」．

４　考察

インタヴューを終えた筆者が率直に感じたことは，生野における在日韓国・朝鮮人社会は決して一枚岩ではないということだ．そして，筆者はここに民族関係の結合関係の可能

性があると考えた．その際，参考になった研究がある．山岸俊男の「信頼」に関する実証的研究だ．まずは、山岸の議論を概観してみる．

4.1　「信頼」

山岸が定義する「信頼」とは，「社会的不確実性が存在しているにもかかわらず，相手の（自分に対する感情までもふくめた意味での）人間性のゆえに，相手が自分に対してそんなひどいことはしないだろうと考えることである．これに対して安心は，そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることである」（山岸　1998:40 ）．「社会的不確実性」とは，「相手に騙されてひどい目にあったりする可能性」(山岸 1998:15)のことだ．山岸によると，「信頼が必要とされるのは社会的不確実性の大きな状況であり，逆に言えば，相手に騙されてひどい目にあったりする可能性がまったく存在しない，つまり社会的不確実性がまったく存在しない状況では，信頼は果たすべき役割をもたない」（山岸　1998:15 ）．しかし，社会的不確実性に遭遇すれば誰もが「信頼」を得るわけではない．人間には「他者一般を信頼する傾向の強い『高信頼者』と，そのような傾向の弱い『低信頼者』」（山岸　1998:21 ）の 2 つのタイプがあるからだ．ここで注意すべき点は，「高信頼者はたんなるお人好しではない」（山岸　1998:7 ）ということだ．高信頼者は「特定の相手が信頼できるかどうかに敏感」であり，「相手が実際に信頼に値する行動をとるかどうかをより正確に予測できる」．一方，低信頼者は「特定の相手が信頼できるかどうかの手がかりになる情報に鈍感」であり，「『人を見たら泥棒と思え』と決めつけてかかる傾向にある」（山岸　1998:7-8 ）．

さて，「一般常識では，信頼は人々の間の結束を強める働きをする」のだが，「信頼にはそれと同時に，人々を固定した関係から解き放ち，新しい相手との間の自発的な関係の形成に向かわせるという，関係拡張の側面もある」．（山岸　1998:4 ）こうした関係拡張がなされるのは，社会的不確実性と「機会コスト」が共に存在する場合だ．「機会コスト」とは，「別の相手と取り引きをすれば得られたはずの利益と，現在の利益との差」（山岸　1998:6 ）のことである．社会的不確実性と「機会コスト」が共に存在する場合，関係を拡張することは機会コストを減らすことに繋がる．また，関係拡張は低信頼者には難しい．低信頼者が社会的不確実性に遭遇すると，高信頼者に比べて「特定の相手との間にコミットメント関係を形成し維持しようとする傾向がより強い」（山岸　1998:84 ）からだ．

4.2　関係拡張と民族関係の結合関係の可能性

生野の在日韓国・朝鮮人社会にも，社会的不確実性が高いという側面がある．これは頼母子講において強く見られたし，職場（工場）での人間関係，在日韓国・朝鮮人の会社との取り引き，そして，それら以外の知人とのつき合いにおいても，程度の差はあるようだが見られた．山岸の議論にあるように，社会的不確実性に遭遇した場合，人間には高信頼者として生きるのか，あるいは低信頼者として生きるのか，２つの選択肢が用意されることになる．そして，Ｙ氏とＺ氏の場合は，高信頼者として生きてきたといえる．

まずＹ氏の場合を振り返ってみよう．Ｙ氏には生野に来てから一貫して慎重さが見られた．つまり，一貫して「特定の相手が信頼できるかどうかに敏感」だった．Ｙ氏は生野に来たことを後悔し帰国を望むが，強制送還の船が収容者が定員に達するまで出航しないことを知ると，どうしても警察に自首することができなかった．このときＹ氏はとても慎重だった．在日韓国・朝鮮人の会社にも慎重だった．在日韓国・朝鮮人の会社は「後でもめることが多い」という情報に敏感に反応していた．一方日本の会社とつき合う中で，日本の会社は「何の疑いもなし，正直に」取り引きできると「正確に予測」していた．言い換えれば，Ｙ氏が日本の会社と取り引きをする動機は，在日韓国・朝鮮人の会社と取り引きをしたら支払うことになった機会コストを減らすことであった．そのため，Ｙ氏の日本の会社との取り引きを信頼の関係拡張の側面として捉えることができる．頼母子講にも慎重だった．「ものすごく怖さがあった」ため，１度も頼母子講に入ることはなかった．銀行との取り引きを始めたのは，銀行にそのような「恐さ」がなかったためで，これも「信頼」の関係拡張の側面として捉えることができる．Ｙ氏は日本の会社から仕事がこなくなると，「思いきって」在日韓国・朝鮮人の会社と取り引きをするのだが，これにより身をもって在日韓国・朝鮮人の会社が信用できないことを判断することになる．そんな折に，在日韓国・朝鮮人の福祉団体が空き部屋を探しているという情報を手にすると，直に会ったうえで貸すことを決めている．ここにも「信頼」の関係拡張の側面を見ることができる．

Ｚ氏の場合，生野に来てから 40 歳になるまでは知人に無心されるなど騙される経験もしている．そういう経験を経て，また義母との確執等を経て高信頼者として生きるようになったといえる．在日韓国・朝鮮人の会社から靴作りを頼まれたとき，この会社との関係に固執せず，まだまだヘップサンダルの需要があることを見込み，日本のヘップサンダル

の会社と新たに取り引きを始めた．ここにも「信頼」の関係拡張の側面が見える．頼母子講に対しては深くつき合うことはしなかった．慎重だったと言える．他者とは，「言ってもわからんかったらその人にはしゃべっても一本線引いて」付き合った．「特定の相手が信頼できるかどうかに敏感」だったと言える．

Ｙ氏とＺ氏はともに，日本の会社との取り引きという形で日本人との結合関係を築いていた．この関係は，先行研究で述べた谷の「バイパス結合」として捉えることができる．一方，「信頼」の関係拡張の側面として捉えることもできる．そこで，「バイパス結合」を促す要因の１つとして「信頼」の関係拡張の側面を挙げておきたい．つまり，「信頼」の関係拡張の側面には民族関係の結合関係を促す可能性がある．

5　まとめ

生野の在日韓国・朝鮮人社会には，社会的不確実性が高いという側面がある．そして，Ｙ氏とＺ氏は高信頼者であった．そのため，Ｙ氏とＺ氏の生活史には「信頼」の関係拡張の側面が見られる．日本人との結合関係もその１つだ．「信頼」の関係拡張の側面には民族関係の結合関係を促す可能性がある．

文献

飯田剛史　2002『在日コリアンの宗教と祭り―民族と宗教の社会学』世界思想社

伊藤亜人・大村益男・梶村秀樹・武田幸男・高崎宗司監修　2000 『朝鮮を知る事典―新訂増補』平凡社

姜信子　1987『ごく普通の在日韓国人』朝日新聞社

金賛汀　1985『異邦人は君が代丸に乗って―朝鮮人街猪飼野の形成史』岩波書店

大阪市計画調整局企画調整部統計調査課　2003『大阪市統計書―平成14年版』大阪市

谷富夫　1989 「民族関係の社会学的研究のための覚書き―大阪市旧猪飼野・木野地域を事例として」『広島女子大学文学部紀要』24:63-86

――　1992 「エスニック・コミュニティの生態研究」鈴木広編『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房:260-283

――編著　1996 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社

――編著　2002 『民族関係における結合と分離―社会的メカニズムを解明する』ミネルヴァ書房

山岸俊男　1998 『信頼の構造―心と社会の進化ゲーム』東京大学出版会

資料

インタヴュー項目（１回目）

①　基本項目

・生年月日

・出身地

・家族構成（定位家族・生殖家族）

・結婚歴

・地域移動歴

・職業歴

・同化の傾向があるかないか

②　来日について

・理由，目的

・いつ，誰と来たか

・誰を頼ってきたか

・渡航の手段

③　日本人との関係

④　在日韓国・朝鮮人との関係

⑤　日本に来てよかったと思うこと

⑥　日本に来て後悔したこと

インタヴュー項目（２回目）

①　仕事について

・どうして在日韓国・朝鮮人の会社と取り引きしたのか，しなかったのか

・どうして日本人の会社と取り引きしたのか.

・職人（従業員）との関係

・職人同士の関係

②　頼母子講について

・どうして頼母子講に入ったのか，入らなかったのか.

・頼母子講に入って良かったこと，悪かったこと.

③　銀行について

・どうして銀行と取り引きしたのか，しなかったのか.

・銀行と取り引きして良かったこと，悪かったこと.

一頁あたり字数 1200 字

総ページ数 24 頁

400 字詰め原稿用紙 72 枚